
2000文字の饗宴

遠野 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2000文字の饗宴

【コード】

N3330Q

【作者名】

遠野 桜花

【あらすじ】

創作五枚会便乗参加作品。

不安（前書き）

テーマ 不安

禁則事項

会話文の禁止

！、？の使用禁止

名前の記載禁止

不安

終礼間際の教室。その教室の真ん中の机に座って、私は担任のしよともない話を聞き流しながら、終礼の終わり待っていた。既に教科書やら電子辞書やらを押し込んだ鞆は私の肘の下敷きとなり、手は既に鞆の取っ手を掴んでいる。私は待ち焦がれていた。まだ、貴方と会えないの。早く、私は貴方を感じていたいのに。バスケットボール部のエースで、勉強も何もかもが出来てしまっ、まるで私のお兄さんみたいな貴方。

早く、貴方に抱かれて眠りたい。そう思うと、私は居ても立ってもいられなくて。気付いた時にはもう、私は並み居るクラスメートを押し退け、玄関目掛けて突っ走っていた。靴箱に上履きを入れると同時に靴を引っ張り出し、本来は禁じられている床履き（玄関付近のタイル張り部分以外のところで靴を履くこと）を躊躇なくやらかして私は校門前に飛び出した。生徒指導の教師から怒声が飛んだようだが、聞かなかったことにする。

校門前を見る。いつもならそこで待っているはずの貴方はいなかった。他のクラスはとっくの昔に終礼を終えているはずなのに。そこで待っていれば貴方も来てくれたのだろうか、背後からデブい先生指導の教師が全力で走ってくる。最も、全力といっても世の高校生にしてみれば徒歩と大差ない。教師には悪いが、その程度で追い付かれるような生徒はいまい。

私は全力で走っていた。教師を振り切るためではない。気の毒な教師は既に引き込み式の門のレールに足を取られてしまったらしく、

盛大に転倒してしまっていた。

貴方に、早く会いたい。

貴方がいないと、まるで私が無力な子供のように思えてしまつた。だつて、貴方は私の誰よりも身近な存在。

そう、両親よりも。

物心ついた時から、私の傍にいた貴方。朝から晩までいつも二人で公園や近くの雑木林を駆けずり回り、一緒にご飯を食べ、一緒にお布団で昼寝をした。小学校も中学校も同じ学校、同じクラスで、いつも一緒にいた。中学校の時、お互いの両親が海外赴任してからは、さらに一緒にいる時間が増えた。私の何もかもが、貴方と繋がっている。過去も、現在も、そしてきつと、未来も。

どれだけ走っていたのだろう。気付けばもう、貴方の家に着いていた。何の変哲もない建売住宅。その隣が私の家だ。小さい時はよく二階のベランダから行き来していたものだったが、お互いに相手の家の合い鍵を持つようになってからそんなことも無くなった。

鍵を鍵穴に突っ込む時間さえ惜しく、私は開錠したドアを蹴り倒して貴方の家に入った。タイル張りの玄関に貴方の靴はなかった。

一体、貴方はどこにいるの。早く、会いたい。そう思つて二階への階段を駆け上がり、貴方の自室に入る。誰もいない、ただ私だけが在る部屋で、私は貴方を待っていた。

ああ、お願いだから、私を突き放さないで。もはや貴方は、私の全てだから

いつものように彼女を待とうとしていたら、担任に問答無用で宿題ノートを職員室に運ばされ、同じ目に遭ったクラスメートと担任を呪詛しながらノートを運び終えたあと、玄関に行くとき校門辺りに人だかりが出来ている。部活の後輩を捕まえて話を聞くと、彼女が床履きをしたのを見つけて追いかけた生徒指導の教師がコケてしまつたらしい。聞くだけ聞くと俺は走り出した。気の毒なデブ教師にかける言葉はなかった。

寂しがり屋のあいつのことだ。きっと半泣きになって、俺の自室で待っているのだろう。

あいつを、必要以上に待たせる訳にはいかなかった。

珍しく本気で走って、5分ほどで家についた。玄関ドアの開く音で気付いたのか、彼女は俺が自室に入るや否や飛び付いてきた。謝罪と言いつきを口に出そうとしたが、それが出来ない空気だった。彼女にされるがままにベッドにひきずられ、横になると彼女が全力で俺にしがみつく。その白く筋張っている彼女の手を、優しく撫でる力が抜け、腕が自由になつたところで彼女の小さく、柔らかい身体を包み込むようにして腕を回す。

彼女が傍にいる。そう感じ取れるのが嬉しくて、妙に安心だった。うつらうつらとしているのを自覚しながら、俺は全幅の信頼を寄せられる彼女に、心の中で誓った。

お前が俺を必要とする限り、俺は全力でお前を守る、と。

貴方に突き放さたくなくて、私は貴方が帰ってきた時、思い切り抱き着いた。

謝罪も、言い訳もいらぬ。ただ、私の心を満たして欲しい。貴方は少し戸惑っていたようだったけれど、私の願いを叶えてくれた。

むせ返らんばかりの、貴方の匂いと存在に包まれて、私は朦朧とする頭の中で、漠然と思った。

死にそうなくらい、狂いそうなくらい、貴方が、大好きです

不安（後書き）

不安……うまく出せたかな。ナゾ

歓喜（前書き）

テーマ 歓喜

禁則事項 感情描写の禁止（鬼だるオイ）

歡喜

ある県の北西部に作られた、学術研究都市。何もかもが数字と科学で統制され尽くし、延々と同じ構造のビルが立ち並ぶ、ただ無機質で合理的過ぎる町並み。

あと少しでも削り取れば、血が出てしまいそうなほどに世界は切り詰められている。ご多分に漏れず、私の通っている学校もそうだ。最小限のスペースに押し込まれた教室や各種施設。外から見れば、まるでそこはコンクリートの枢のようだ。単調で、何の変わりもない日々。

そんな殺伐とした世界に、一人の少女が転校して来た。

「はじめまして、早水音璃桜はやみづねと言います」
真四角の、教室と呼ばれる空間の空気が、璃桜のはっきりとした声に引き裂かれる。

濡羽色の、腰椎に届くほどの長い髪。澄み切った、深淵のような黒い瞳。ほっそりとした、だけど決して痩せぎすではない肢体。制服から覗く、雪のように白い肌。

同じ人間だと思えないぐらい、璃桜は綺麗な人だった。

璃桜はどこにいても、何をしても不思議なぐらい絵になった。そして、璃桜はいつも屹然としていて、なし崩しに流されたりせず、自分を保っていた。

学校も家庭も、私には何も面白くなっていなかった。全てが、日常という機械の部品に成り果てていたから。いきおい私は璃桜を飽くことなく見詰め続けたり、公園や自室で璃桜のことを考えたりするようになっていった。

私の世界に突如現れた、唯一の非日常

それから時は春、夏、秋と過ぎて行き、骨の髄まで凍り付きそうな寒さと、時たま降ったりする雪が冬を伝えていた。私は前屈みになって息を一つ、深く大きく吐き出した。

そんな刹那、声がした。

「こんばんは、白澄さん」

何かを裂くような、澄んだ声。私ははっ、として前を見る。

「何、してたの？」

「……………ううん、なんでもないよ、早水音さん」

くすつ、と璃桜が笑う。静かで、意味深長な笑み。見透かれたのだろうか。

「早水音さん、なんて。璃桜でいいのに」

「え、でも……………」

「私も、冬花って呼びたいな」

「う、うん……………」

無理矢理押し切られたような形。そのまま流れる、僅かな沈黙。その沈黙を破って、璃桜が言う。

「何か、暖かいものでも飲まない？」

璃桜の誘いに、私は頷いた。

ほんの少しだけでも、二人だけの時間を過ごせるから。

私はココアを、璃桜はホットコーヒーを啜り、たわいもないことを話しながら空き缶をくさごに投げ入れる。あっさりときき缶はくさごに吸い込まれ、金属音がほんの一瞬、鳴り響く。寒さに耐えようとするかのように、私と璃桜は互いの身体を寄せ合う。璃桜の指が私の髪の毛先を弄び、くすぐったい璃桜の吐息が、私の頬を掠る。逃げる訳でも避ける訳でもなく、私は璃桜にしなだれかかっていた。

「冬花。私、怖いのに」

「どうして？」

「このままだと、冬花がいなくなってしまうそう……。このまま、目を閉じて眠ってしまえばずっと、冬花を感じていられるのかな」
一瞬の沈黙。私は璃桜に吐き捨てた。

「……止めてっ!」

その返答を、璃桜は予想していたようだった。くすっ、とまた笑う。

「卑怯、なんだよね」

「……そう、だよっ」

「どうせ、この程度じゃ死ねないのに」

「……えっ?」

私が問うよりも早く、璃桜が私を引き寄せた。

「実はね……私、吸血鬼なの」

「きゆう、けつき?」

ソレは童話の中でしかないはずの、人ではない存在。

ソレが 璃桜。

「……ありえない、って言わないんだね」

璃桜が、私の耳元で囁く。

「きっと……馬鹿にされると思ってたのに」

璃桜は静かに、言葉を綴る。

「私、冬花が欲しくて堪らない。いけないことって、分かっているはずなのに……」

私は、訳が分からなかった。

だって私は、璃桜のことが

「どうして、いけないことなの？ 璃桜が私を、この単調で無機質な世界から引きずり出してくれれば、それでいい」

私は璃桜の目の前に、自らの首筋を投げ出した。

「お願い……私を、ここじゃない所に連れて行って」

「……いいよ。この行為が、冬花にどういったものをもたらすかは分からない。けれど……」

「ありがとう、璃桜……」

璃桜が回している腕に、きゅっと力が入る。私は璃桜の腕に手を添えた。それは意思表示。

「璃桜、私はどこにも行かないよ」

「ごめん、冬花……」

璃桜の手は、震えていた。そして、唇が触れる感触がしたと思うと、私の皮膚が破られ、血が噴き出すのが感じ取れた。

ふわり、ふわりと紗シのような白いベールが、視界を覆う。

瞼を閉じようとした刹那、見えた璃桜の表情は、まるで慈悲に満ち溢れた聖母のよう。一片の、白い破片のようなものが視界に捉

えられた時、私は呟いた。
「あ、雪が、降ってる……」

十

初めて冬花と会った時から、私は冬花のことが好きだった。周りに流さまいと、必死に喘いでいる冬花が。

そんな冬花は、とても綺麗だった。もちろん、今こうして眠っている冬花も、ものすごく可愛いだけけれど。

お休みなさい、冬花。

私は何時だって、冬花の傍にいるから。

冬花が望む限り。

歡喜（後書き）

うわやば……訂正しました

光景（前書き）

テーマ 光景

禁則事項 固有名詞使用近所

直喩の使用禁止

（オイ引っ掛かってんだろ、という箇所を感想に書いて頂ければ幸いです）

光景

5月11日早朝。

出撃の前に、彼は愛機の目視点検をしていた。見たところ異常はないのを確認すると、彼は主翼に足を掛け、コクピットに滑り込んだ。機体の割に広いコクピット内を点検する。一般的なステイツク型の操縦桿。機体やエンジン関係の計器やレバー。弾がないため射撃できない機銃のスイッチ。燃料は不慮の事態に備えて満載され、翼端は少し下がっている。それを確認し終えた彼は最後に、拳銃と短刀を確認した。

「生きて捕虜の辱めを受けず」
拳銃と短刀は、その意思の表れか。よもや使う可能性はないだろうが、彼は律儀に拳銃の弾倉と安全装置を確認し、短刀が鞘から出ないように固定した。あとは爆弾の信管が、ちゃんと作動してくれるのを祈るだけになる。これが彼にとって、最後の実戦になるだろう。それは僚機も同じだ。

風防ごしに横を見ると、僚機が同じように発進準備をしていた。機銃弾は搭載していないが、機体の下に搭載された爆弾を除けば外見に変わりはない。だが速度、機動ともかなりの影響を受けるには違いなかった。それをいかに克服するかが、突入の可否を分けるだろう。

午前六時四十分、彼の所属する特攻隊に出撃の命令が下った。全長9・05メートル、全幅12・0メートル、正規全備重量2・5トン、最高速度533・4キロメートル。それが滑走路を速度を増しつつ走り出す。そして不意に機体は浮き上がり、彼は機上の人となった。

幸運と言うべきか、ほとんどが戦時急造部品と流用部品で組み立てられている、平時なら飛行が許可されるかどうかも怪しい彼の機体は好調に飛んでいた。そういつた粗雑な部品で組み立てられているのは彼の機体に限ったことではない。それは僚機や直掩の航空隊も同じような有様だ。

陸地が途切れ、眼下に海原が見えるようになった。彼はコンパスを目標に向けて調整し、機体の方向を小刻みに変えていた。海は目標になるものがひどく少ない。下手をすれば迷子になる。だが、そのための訓練を彼らは受けており、迷子になる機体はなかった。退屈とはいわないが、空はひどく平穏だった。四時間半ほどの飛行で、とうとう目的の島まで約100キロの地点に達した。すでに敵軍のレーダーピケット艦がこちらを探知し、全軍に伝えているだろう。もうすでに、レーダーピケット艦と思われる小型艦からの対空砲火を受けていた。

通信機で連絡をとった訳でもないのに、全機が速度を上げた。まだ燃料には余裕がある。どうせ生きては帰れぬ身の上、燃料を節約する必要は全くないのだ。彼は敵艦からの対空射撃を避けるために機体の高度を上げた。高射砲弾の爆風が機体を煽り、断片が突き刺さる。敵の迎撃機が視認できた。直掩の航空隊が護衛任務を果たさんと敵機と交戦するが、圧倒的な対空砲火と敵機の前に味方機は一機、また一機と撃墜されていく。持てる限りの技量を尽くし、なんとか敵機と機銃弾の嵐をかい潜った彼の目に、一隻の大型空母があった。

念願の正規空母だ。彼は突入しようとしたが、隙のない厚い弾幕に突入を遮られる。だが、その弾幕が突然乱れた。低空飛行で肉薄した味方機が飛行甲板に突入し、甲板上の艦載機を破壊、炎上させたのだ。だが投じられた爆弾は突入角度が浅かったために飛行甲板に弾き返されてしまった。しかし、火災のせいで気が動転したらしく、効果的な弾幕が形成されていない。

この犠牲を、無下にする訳にはいかない。そう彼は判断し、通信を出した。

「ワレ突入ス」

彼はその空母目掛けて、機体の許す限りの速度で急降下を仕掛けた。最初は小さかった空母がぐんぐんとその大きさを増してゆく。機体のフレームが、あまりの空気抵抗に悲鳴をあげる。ひどく不気味な音がコクピット内に充満するが、もう何も彼に不安を与えるのは不可能であるようだった。

高度500メートル辺りから、ようやく弾幕が激しさを増した。機体を掠めて40m機銃弾が飛んでいく。至近距離で爆発した機銃弾の破片が機体に穴を穿つ。

高度100メートルにまで機体は高度を下げた。怯えた表情で機銃を撃つ敵兵の姿が見える。もう爆弾は必中の範囲だと判断して、彼は爆弾懸下装置を解除した。束縛を解かれた爆弾はそのまま、重力に引かれて落ちてゆく。投下された爆弾は飛行甲板を貫通、その下の航空機格納庫で爆発した。

彼は爆弾の命中を確認すると、高度計を確認した。既に高度は20メートルを切っている。最早機体の立て直しは不可能だ。そのまま彼は燃え盛る炎の中、艦橋に突っ込んだ。

午前十時九分の突入の瞬間、三百人以上もの兵士が死に、ほぼ同数の兵士達が傷ついた。艦本体も本国での修理が必要なほどの深刻なダメージを受け、艦内は阿鼻叫喚の地獄と化した。

そのとき、彼の脳裏に浮かんだ光景は、一体何だったのだろうか？ 奇跡的に残された彼の遺品は、何を語ろうとも決して答えを返してはこない

光景（後書き）

バリバリの戦争もの。しかも特攻（爆）

大変だった……分かる人にはパイロットの名前も空母の艦名も丸わかりでしょうね（笑）

砂漠（前書き）

テーマ 砂漠

禁則事項 擬態法使用禁止

擬人法（偽物表現も含む）使用禁止

なってねえよどあほう、という箇所があれば言って頂けると幸いです。

砂漠

さあ、行こう？

海霧が視界を覆う。靴の裏から、砂の感触が伝わってくる。私を引っ張るのは彼女の、白い腕。

走る、走る、走る。

砂に足がとられそうになっても、彼女は手を引っ張る。

何故、と尋ねるのは愚問以外の何物でもないだろう。きっと彼女は、答えてくれないし、答えてくれた試しもない。だけど、どうしてなのだろう。

そんなもの、分かるわけがない。私だって、分からないのだから

十

心が無くなってしまうえば、どれだけ楽なのだろう。私はいつも、そう思っていた。

給食の配膳を零した。雑巾から水気が出ている。しゃべる時に唾を飛ばした。

些細なことをあげつらい、その反応を楽しんでいた。何故だかは分からない。だが、小学校の中学年から始まったクラスメート達の行動は、歳月とともに着実にエスカレートしていった。

もう、何もかもが私を嘲笑うかのようで、気付けば私は誰とも言葉を交わせなくなった。

この私立高校を選んだのはただ単に、同じ中学校から行く人間がいなかったからだ。少しでもいい。逃れたかった。

容易に心の内を明かせば、またあの地獄の様な日々を味わうことになる。そうなるぐらいなら、もう二度と、心を開くまい。

そう、心に誓ったはずなのに。

彼女、立野由月は、それをこじ開けようとする。

由月、貴女は何がしたいの？

幾度も問うた。だが、彼女が答えてくれたことは一度もなく、その度に私に抱き着いてくるだけだった。そして、私は邪険に彼女を引き離し、息が切れるまで逃げるのが通例だった。

傷口をえぐり出して、またあの痛みを味わせるつもりなのだろうか。だったら、由月に近づいちゃいけない。

なのに、どうして、こうも運命は意地悪なのだろう。私はいつも、由月から逃げられないのだろう。もしこの冬休みが私の予定通り進んでいれば、私は家から何千キロメートルも離れたここに、いるはずがないのだから。

私は怖い。由月の、その綺麗すぎる笑みが。

何か、得体の知れないものが、由月の中に潜んでいそうで……………

どれだけ走ったのだろうか。霧のせいで視界は三百メートルほどしかない。気温は砂漠とは思えないくらいにうすら寒い。もう足の感覚はほとんどなく、ほぼ惰性で進んでいた。

不意に由月が足を止めた。私は足がもつれて転びそうになる。それを由月が苦笑しながらも助け起こすと、微笑んで私に話しかけた。
「綾乃」

それだけ言うと、由月は私を抱きしめた。いつものように、私は由月から逃れようとする。だけど、いつもならたやすく逃れられるはずの腕から、私は逃れることができなかった。逃げようともがけばもがくほど、由月の腕にこもる力が増してゆく。

由月はこのまま、私を絞め殺してしまうつもりなのだろうか。

死にたくない。由月に、殺されたくない。嫌だ、こんなところで死にたくない

「……可愛い」

どれぐらい力任せに暴れ回ったのだろう。唐突に、由月の唇から言葉が洩れた。いきなりすぎるその言葉に、私は呆然として動けなくなった。硬直している私を、向かい合うようにして抱きなおした。

耳元で由月が囁く。

「高校に来てからいつも、私は綾乃を見てた。だけど、いつだって綾乃は笑ってくれなかった。怒ってくれなかった。泣いてくれな

った」

そこで一旦、言葉を切る。心を閉じてしまった人間に、そんなことができる訳がない。そう反論しようとした時、また由月が口を開いた。

「どうして綾乃が、心を閉ざしてしまったのかは分からない。分からないけれど、私は寂しい。

だって、さっきの綾乃は、ものすごく可愛かったから。

心を侵食する砂漠が止められないのなら、人は誰だって心を閉じてしまおうとするかも知れない。だけど、心に背いてもきつと、綾乃が傷ついてしまうだけ。

一人でできないのなら、私が手伝う。だから、綾乃が綾乃を殺す必要なんて何も無い。

だって、綾乃は、とても綺麗で、可愛いから。綾乃のためなら、

私は何だってしてあげる」

何かが、私の頬を伝った。それが涙と気づくまで、数秒の時を要した。

「泣きたいなら、我慢しないで」

そう、由月が言ってくれた。次から次へと涙が溢れ出す。

嗚呼、私の欲しいものは、これだったんだ。

いつまでも私を包んでくれる、この温もりと優しさが

十

未だに寒さが色濃く残る中、新しい学期が始まった。

「おはよう、綾乃」

「おはよう、由月」

私を包んでくれる、暖かい、由月の身体。

まだ、緑化できた訳ではない。

だけど、きっと二人なら、出来るはず。

砂漠（後書き）

はあ……短い。

では。

幸福（前書き）

テーマ 幸福

禁則事項 手抜き禁止

遅れてしまつてすみません m () m

幸福

放課後、私とえりはいつもの場所にいた。誰にも邪魔されない、そんな二人だけの時間。この部屋には私と彼女の二人だけ。誰もいない、誰もいない。

きつと外は、とても活気に満ちているだろう。運動部の掛け声、吹奏楽部の演奏、そして教室や廊下で談笑に耽る生徒達の声。

それが多分、放課後のあるべき形。だけど、光があれば影がある。もう特別教室以外、ほとんど使われなくなった旧校舎の放送室。静かで、一人だと発狂してしまいそうなくらい静かな場所。

だけど、えりと二人でいるのには好適な場所だった。ずっと、二人でいられるから。

広いとは言えないが、それなりのスペースがあるのにわざと身体をくっつけて座る。二人で、たわいもないお話をしたり、持ち寄ったお菓子を摘んだり。そんな、二人だけの時間。

暖かくて、くすぐったくて。私はいつも、この時間が好きだった。

「……みき？」

えりが私にしな垂れかかる。えりの瞼は眠たげに半ば閉じられ、声も眠たそうだった。きつと体育の持久走がこたえたのだろう。

「えり、眠いの？」

「……うん」

「今日の持久走、大変だったもんね。いいよ、いつまでも一緒にいるから」

「ありがと、みき……」

えりは幸せそうに微笑んで、目を閉じる。眠ってしまったからといって、私は退屈な訳ではなかったし、また静けさの中に包まれた恐怖がはい出てくる訳でもない。柔らかで優しい寝息が私の耳朵をくすぐり、眠りに誘う。きめ細やかでお人形のような造作はいつまでも見飽きることはなく、私は時間が止まってしまえばいいのにと、叶わぬ願いをしてしまう。

いつも優しくくて、可愛くて、そしていつも真っすぐで。えりは私の憧れの人。

そのことに、えりは気づいてる？

私はえりのことが大好きで、えりの全てが欲しい。えりとずっといられるなら、私は何を捨てても惜しくない。

だけど、きっとえりは傷つく。だってえりは、とても優しい人だから。

ごめんね。ダメなこと、いけないことだって分かってる。でも、もう私、えりが欲しくてたまらないの。

ずっと傍にいたことが叶わないのなら、私とえりを掴んで放さない、強い絆が欲しい

私は眠っているえりを床に横たえた。ものすごく無防備で、綺麗で、純粋なえり。そんなえりを、私が初めて汚す。

そして、えりに覆いかぶさるようにして、起こさないよう細心の注意を払いえりの滑らかな頬つぺたを舐めてみる。甘くて、少ししよっぱい。

頬つぺたを舐めると、私はまたえりの顔を見た。えりは熟睡しているのか、可愛い寝息をたてていた。

綺麗なピンク色をした、えりの唇はどれくらい甘いのだろう。ゆつくりと、でも着実に唇を近づけてゆく。そして……触れた。

とても、甘い。私はえりのなかで、えりを求めてえりを侵食してゆく。脳髓が溶けてしまいそうなくらいに身体は熱く、私はえりを無我夢中で求めている。

不意に、唇が離れた。私が顔を上げようとすると、頬に鋭い痛みが走った。そろそろと、えりの顔を見る。えりの身体は小刻みに震えていた。

「もう、……ない……」

もう、来ない？

本当にそう言ったなら、私は無くしたことになる。
大好きで、憧れの人を……。

私は茫然と座り込み、俯いた。遠ざかる足音が途切れ、狂ってしまふような静けさが私を押し潰そうとする。えりに叩かれた頬が灼けるように痛い。心の中から、後悔が溢れ出してくる。

私の中で、何かが切れたように涙が零れた。

一度切れれば、収まるまで戻らない。それはなんでも同じ。押さえようとすることは始めから無為だった。いくら泣いても、後悔は深まるばかりで……

涙なんてとつくの昔に枯れてしまっていた。泣きたくても、もう涙は出ない。ただ後悔が溢れ出すばかり。

「じゅめんね」

そんな声が、聞こえた気がした。柔らかくて、甘い匂いが漂ってくる。

「ごめんね、みき……」

私は顔を上げた。えりが心配そうな顔を向ける。

「痛かった……？」

そう言つて、えりは私の頬に手を当てる。私は反射的に頷いた。

「……そう。みきの思いを、傷つけちゃったんだね。みきに、他意はなかったのに……」

えりは私を、しっかりと抱きしめてくれた。暖かくて、柔らかくて、甘くてとてもいい匂いがする。それは、私の大好きな、そして憧れの人の感触。その感触を味わえて、私は急に眠気を覚えた。

「みき、みきの思いを……私に、教えて？」

「私、ずっとずっとえりと一緒に居たい」

私がそう言つと、えりはポケットから赤いリボンを取り出した。その一端を私の小指に結わえ、もう一端をえりの小指に付けた。

「もう絶対に、みきのこと離してあげない。お休みなさい、私の妹
姫」

少し、芝居がかかった言い方。だけど、それでよかった。

それは、私の望みだったから。

幸福（後書き）

百合ばかりですいません……

響・ECOさん / イカレ帽子屋さん / 河野夜兔さん / 月島真昼さん / syouさん / 六花霞螢さん / 京元緋呂さん / 滝千博さん / 聖騎士さん / カエデ・アグさん / 妃宮咲梗さん / 河美子さん / そうじたかひろさん / 星野雫 (Eiwing) さん / / ごはんライスさん / 時満さん / 市太郎さん / ささき (原作) さん / 皆倉あずささん / 舞月音子さん / スリースさん / 金剛石さん / 大橋秀人さん / 相良マミさん / 赤釘春流さん / 絡屋烈さん / 麦藁帽子さん、そして主催者の無言ダンテさん、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330q/>

2000文字の饗宴

2011年10月7日20時51分発行